

避難所運営と学校経営について

県立大槌高等学校

校長 高橋 和夫

大槌高校は地区の避難場所には指定されていたが本来避難所ではない。しかし、津波だけにかかわらず、いったん、災害が発生すれば学校という場所は避難所になりうるのである。

学校は小さな町であれば町の中心となり地域住民の支えとなるもので、その運営には教職員が頼りとなる。大槌高校在籍者345名の内、6名の生徒が死亡または行方不明となり、家族の死亡、行方不明、自宅の全壊、半壊、保護者の失職などによる被災生徒は209名にものぼった。

県内、県外への転学者も17名おり、大変寂しい思いをしながら送り出した。転学先で親切にしてくれているという話を聞き大変ありがたく思っている。職員は全員無事であったが、約3分の2が住まいを失う状況であった。

3月11日から8月7日まで校舎が避難所となり、震災当日は約500名の避難者数であったが、その後、数は増加し、ピーク時は1000名近い町民が避難する町内最大規模の避難所となった。



3月11日 避難所としてスタート

避難所の運営にあたっては避難者の人命を第一に考え、安全面、健康面、衛生面に配慮した。

少しでも安心して避難生活を送れるようにとの思いであった。

職員の勤務は4月20日が始業式であったことから、3月11日から4月19日までは、通常勤務以外の時間を災害対応とした。平日、土日関係なく原則5日間の勤務とし、2日休業という職員のローテーションを組み、休業は災害時特別休暇、振替、年次などで対応した。

学校が始まった4月20日から4月30日までは毎日の宿直(男性職員2名)、休日の日直(女性職員2名)を配した。5月1日からは臨時嘱託員を3名配置していただき本当に助かった。これ以降、職員は通常勤務に戻ることができた。職員の業務内容では、医療チームが入る前ということもあり、体調不良者、病人等への対応が一番大変であった。これは主に養護教諭、女性職員、一般避難者の看護師で対応することとした。



食事を提供する生徒・職員

生徒、職員で食事の提供も行った。食器を冷たい水で洗うなど、生徒達はよく手伝ってくれた。また、物資が不足する中で行った配給作業は職員のストレスとなったが県教委派遣の支援チームに助けられた。

大槌町からの要請に応じ、グラウンドでの自衛隊駐留、大槌中学校3年生への教室提供を行った。しかし本校生徒の将来を守りたいという気持ちから、グラウンドへの仮設住宅、仮設校舎の建設については受け入れることができなかった。

当初、自衛隊駐留は学校が再開するまでの予定であったが、4月に入り2、3ヶ月延長願いたいという申し出があった。その時は思わず、「子ども達の夢をつぶしますよ」と答えてしまったが、今になれば大人げない対応だったと思っている。この自衛隊駐留について、生徒達は、自衛隊は町の復興のために尽くしてくれたのだからと本当に素直に感謝していた。



6月8日 自衛隊の撤収が始まる

それは自衛隊が撤収する際に、生徒会の執行部、野球部などが感謝の色紙、手紙を手渡したことからもうかがえる。

生徒たちは自分たちで仕事を見つけ積極的、献身的に活動してくれた。そんな生徒達に駆けつけた達増知事から「生徒諸君は凄い。君達は最高だ」との言葉をいただいた。また、マスコミによって、避難所の様子が報道され、多くの方から支援、激励などが寄せられた。これらは生徒の大きな励みとなった。その一方で、次々訪れるマスコミへの取材規制など、外部への対応に多くの時間を費やすこととなった。

学校再開には学習環境の整備、交通の手段の確保、そして全ての教室に居た避難者の移動など多くの課題があったが、町との連携で一つ一つ解決し実現することができた。

始業式、入学式を挙げるにあたって、校長として生徒達に何を伝えればいいのか非常に悩んだ末、震災を乗り越えて生かされた命をいかに大切にし、これからどのように生きていけばいいのかという話をする事とした。

学校再開に際し、人事の凍結は生徒にとって気心の知れた先生が残ってくれるという安心感へつながった。生徒達は表面上、元気に見えたが、健康調査を実施すると体調不良、様々な心の問題を抱えていたことから、生徒の心のケアが最も重要な問題であった。

体調面、メンタル面でのケアはこれからが重要となってくると思われ、臨床心理士、スクールカウンセラーの援助が今後ますます必要となるであろう。

防災教育においては「津波てんでんこ」の徹底、そしてどのような状況で災害に遭遇したとしても生徒が自分で適切な行動ができるような判断力を育てることが重要であると考えます。

学校を再開するために多くの支援をいただいた。この支援のおかげで職員、生徒が前向きに頑張ることができただけでなく、なにより生徒たちは震災を体験することにより大きく成長することができた。

今後は大震災、避難所運営をした町内唯一の高校として後世に記録を伝えていかなければならない。それに向け現在、学校として記録冊子を作成中である。

自然の驚異をまざまざと見せつけられた今回の大震災津波。自然はいつ牙をむいてくるかわからない。東日本大震災の経験を忘れてはいけない。絶対に風化させてはいけない。津波は自然現象であり、必ずまた起こりうる災害なのである。

